

甚齟齬る而已ならず、共に岩淵の深理を極得しにあらねば、其末流を汲徒をや、又空蟬の世に、此技を業とする人、多くは盲人、寡婦、或は流落家、貧學醫生輩、此技を以て、糊口の資とするに過ず、是に因て、此術をするを、倭文手纏甚卑しめり、さる故、識見人は、此術をしも、恥且惡む事にはなりたり。

〔曲亭漫筆下〕鬼貫が傳同道引

鬼貫姓は、上島氏、俗稱は與總右衛門、槿花翁と號す、攝州伊丹の人なり、後大坂に家して、姓を平泉と更む、はじめ俳諧を維舟及宗因に學び、後一家をなす、鬼貫獨言同句選等世に行はる、元文三年八月二日、七十八歳にして沒す、伊丹墨染寺に墓あり、浪花客中、或人の話に、鬼貫、中ごろは行れざりしにや、ひところ和州郡山侯の足輕などつとめ、その後大坂にすみて、小兒の道引などして、かすかに世をわたりぬ、今なほ大坂に鬼貫道引とて、小兒の療治に、足より上へも上の按摩の法のこれり。

〔甲子夜話六十二〕林曰、或人ノ談話ニ、故豆州松平信臨終前ノ疾、腫氣ニテ、不通ニナリシトキ、一醫案腹シテ、小水ヲ通ズル秘術ヲ爲ス者アリト聞テ、其者ヲ呼デ案腹セシムレバ、果シテ通利アリ、ソノ翌日ニ、醫至リテ、又案ズルトキ、豆州云フ、今度、我ガ疾ハ逆モ不治ト覺ヘタリ、モハヤ頻ニ案スルニ及ブマジ、併シコノ法ハ、平素未ダ知ラザル所ノ奇術ナリ、諸人ヲ救フベキ大切ノ術ナレバ、秘セズシテ、ソノ傳ヲ廣クスベシト、諄々曉諭セリトゾ、真ニ老職得體ノ言ト謂ベシ、折ニ觸レ、何カノ事ドモ、思出デ、痛惜ニ堪ザル人ナリケリ、

諸國盲人業之スル者多シ、或ハ盲目ニ非ルモノアリ、或ハ得意ノ招ニ應テ行クノミモアリ、或路上呼巡リテ應需ズルアリ、蓋三都諸國トモニ、振リ按摩ハ小笛ヲ吹ヲ標トス、振ハ得意ニ往々路